

序文のパラドックスと悲観的帰納法

大西勇喜謙（総合研究大学院大学）

悲観的帰納法とは、過去の科学理論の失敗から現在受け入れられている理論へも疑問を呈するという、主要な反実在論的議論のひとつであり、近年では、対抗仮説を思いつく人間の能力に関するものや、理論の正しい部分を同時代的に判定する能力に関するものなど、いくつかのバージョンも加わって、依然として影響力をもっている。悲観的帰納法への実在論側の応答としては、コミットメントを理論の特定の部分に限る、選択的実在論と総称されるものが主流であったが、近年では、過去の（あるいは他分野の）事例の関連性（relevance）自体を否定し、分野ごとの特性をふまえて、あくまでそれぞれの理論に関する直接的な証拠（first-order evidence）に基づいて理論を評価しようという、ローカリズムと総称されるアプローチも支持を得てきている（こちらも様々なバージョンがある）。

こうした、理論に関する直接的証拠に基づく評価と、過去のパフォーマンスといった別ルートからの考察に基づく一般的評価との間の緊張関係は、認識論で「序文のパラドックス（the preface paradox）」として知られているものと一定の類似性があるように見える。しかしながら、序文のパラドックスと悲観的帰納法との関係は、Roush (2010) によるものを除いては、あまり深く論じられていない。本発表では、認識論において提示されてきた、序文のパラドックスに関する様々な解法や Roush の分析を批判的に考察することで、悲観的帰納法に対する、新たな（というより、よりニュアンスの効いた）実在論的応答の可能性を指摘する。